

○聖書箇所 マルコによる福音書 9章42～50節

「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出さなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。人は皆、火で塩味を付けられる。塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごさなさい」。

○説教「火によって塩味を付ける」

みなさん、おはようございます。オンラインで礼拝されている方もおはようございます。今日はゴールデンウィークの後半の日曜日ということで、教会員や定期的に礼拝に出席されている方々の他、初めての方、ご旅行中の方も礼拝に出席されておられます。また、反対にいつも来られている方々の中には、帰省やご旅行でお休みの方もおられると思います。今週の歩みが皆さまにとって良き出会いと休息の時となり、心と体のご健康が守られますようにお祈りしています。

私たちは現在、イエス・キリストの復活を覚える時期を過ごしています。復活したイエス・キリストが大切にしていたことは、使徒言行録によるならば、ご自分が生きていることを、数多くの証拠を持って弟子たちに示し、神の国について話すことでした。神の国とは何か。私たちはこのように問われるならば、すぐに「天国」という言葉が思い浮かびます。皆さんはこの天国をどのようにイメージしているでしょうか。実は、マルコによる福音書では神の国と書かれていますが、マタイによる福音書では天の国と書き換えられています。ほぼ同一の意味として考えることができますが、天の国というのは、ギリシャ語では天が複数形になっています。より厳密には天天と訳すべき言葉です。つまり、天は私たちが見上げてわかる様に、私たちの上だけではなくすべての者の上に広がる広がりのある概念であるということをお伝えしておきたいと思えます。

聖書箇所に入りますが、今日は先ほど同じ箇所から子どもメッセージをいたしました。正直に申し上げて、この箇所から子どもメッセージを語るのはとても難しいことであると感じました。というのは自分自身でさえ理解できているのかわからない出来事を、説明すると言うのは、非常に困難なことであるからです。本音を言うならば、できれば説教としては選びたくない箇所です。それでは何故、今日この箇所を選んだのかと問われるならば、それは私たちがマルコによる福音書の通読を行っているからであり、たまたま今日、この箇所に当たったからです。

わたしは最初、この箇所は読み飛ばしてしまっても良いのではないかと考えていました。その理由は読んでみてお分かりの通り、恐ろしくおぞましい地獄のような場所について語られているからです。この箇所からお話できることなんてあるのかと思いました。しかし、通読すると宣言している以上、

「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか」。死のとげは罪であり、罪の力は律法です」。わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」。(I コリ 15:54-58)

つまり、イエス・キリストの復活、あるいは福音と言うものは、死や死後の恐怖に支配されて、脅かされて生きるためのものなのではなく、主イエス・キリストの救いの喜びと感謝によって生かされるということが私たちには大切なのだということなのです。私たちは世の終わりの時に救われるために生きているのではなく、既に救われたものとして感謝して喜んで生きるのです。これが福音であり、新しい命に生きること、イエス・キリストの神の国の福音なのです。

ところが、今日の箇所はそれだけでは終わりません。そのために大切だとイエス・キリストが言っていることが「火によって塩味を付ける」と言うことなのです。この言葉は、とても理解が難しいことだと思います。というのは、文脈上で読むと、この「火」というのは、前段に出てくる「地獄の火」のイメージがあまりに強いので、その地獄に入らないように、身を律していくことなのかと思ってしまうからです。或いは「火」というイメージにまつわる苦行や試練というイメージによって自らを保つときに、私たちは地獄に陥ることから身を守り、初めて天国に入れるようになると思ってしまうからです。聖書にも「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」とあります。それならば、苦難も良いものだと考えることもできます。

果たしてイエス・キリストがここで言おうとしていることは、そういうことなのでしょう。わたしにはそうは思えないのです。何故ならば、それでは、「火」というものの存在、つまり「地獄」という裁きがあるから、私たちが自らを律して生きて行くことができるというのであれば、それはイエス・キリストの論敵である律法学者、ファリサイ派の人々の理解と何ら変わらないことになってしまいます。それは、正しいものは救われて、罪びとは滅びてしまうという構造に他ならないのです。それでは私たちはこのイエス・キリストが言われる「火」と「塩」をどのように考えればよいのでしょうか。

わたしはそれが、イエス・キリストの「聖霊のバプテスマ」、そして「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である」。と言われたその言葉なのではないかと思うのです。

言いたいことはこう言うことです。つまりここでイエス・キリストが愛を示しているのは、「私を信じるこれらの小さな者の一人を躓かせる者」です。躓かせるという言葉は、訳しかえると「罪を犯させる」ということです。罪というのは、悪を行うことそのものというより、神から離れて行ってしまいます。それは他者の誘いかもしれませんし、自分自身の心の内に出てくる思いかもしれません。それが出てきて神から離れて行ってしまったことは不幸だと言うわけですが、それではイエス・キリストが反対に人々に願っていることはなにかというと、そもそも私を信じて生きていきなさいということです。それは清く正しく行きなさいということではなく、より根源的にいえば、神が愛された私たち自身として生きて行きなさいことです。それが、あなたがたは世の光である。あなたがたは地の塩であるという言葉

に込められています。それは、あなたがたは既にそのまま世の光であり地の塩であるという意味があるからです。

「何故、自分に？そんなに誇るものはなにもないのに？」そうです。しかし神は、その小さな者が神の愛を信じて、自分らしく歩んで行けることを私たちに願っているのです。イエス・キリストは私たちがそういう風に生きていけることを願い、水のバプテスマ、そして聖霊による火のバプテスマを与え、私たちの心を生かすのです。

ところがそういうとき反対に私たちが心に思っていることは何かというと、先週の箇所です。弟子たちの姿が示していたように、私たちの関心ごとは「誰が偉いか」ということであるのです。つまり誰が何をやったか、誰が一番優れたことをしたか。誰が一番正しいことをしているか。そして自分たちもそういう人にならないといけないということなのです。でも、その考え方は、天国に入れるために何をしたか、何をしなかったから天国に入れない。ということになってしまうのです。しかし、それは天国に入るための基準を、神の目ではなく、自分たちの目で決めてしまうということでもあります。

残念ながらわたしたちの関心は、小さな者たちが神を信じて生きて行くことや、その者たちと共に生きていくということよりも、小さな者を排除してしまう、あるいは無視してしまう、躓かせてしまうということがあるのです。

しかし、私たちは、先週の聖書箇所で見たと同じように、イエス・キリストが子どもたちを弟子たちの真ん中に招き、そして抱き上げられたように、私たちも自分たちの真ん中にその小さな者たちを招き、ともにみたようにその人たちを招くということをチャレンジとして与えておられるのです。実は、「私を信じるこれらの小さなもの」というのは、この子どもたちに繋がっているのです。

だから、こう考えることができます。私たちの塩気、私たちが地の塩であるということは、自分たちが保ち続けるためにあるのではなく、塩が周りのものを味付けていくように、私たちは他者が生かされていくように与えられたいのちであるということです。そしてそのように塩気を持ち、互いに関わり歩んでいく時に、この世がまさに多様で寛容で広がりを持った愛に満ちた世に、まさに神さまが願っている世界に、言い換えれば神の国、神が創造されたすべての者たちと共に生きて行くことができるようになるのではないのでしょうか。神の国は、私たちの自分の頭で考えているものより広い、天天の世界を意図しているのです。

「互いに平和に過ごさない」。これが可能なのは、互いに足りないことがない、互いに奪い合う必要がない世界であることです。それができるのは、自分だけでは無理です。仲間だけでも足りません。神が創られた人々と祈り合い、支え合い、喜び合っていくことが大切なのではないのでしょうか。

イエス・キリストが見ておられる「平和」を私たちも共に祈り求めて参りましょう。